

## 今の科学に基づいた未就学児保育・教育を

掛札逸美（心理学博士）

★保育の安全研究・教育センターのサイト：「保育の安全」で検索

<https://daycaresafety.org/>

★YouTube、Facebook：上のサイトにリンク

※以下、発達の部分は資料に基づいていますが、すべて英語なので参照元を書いていません。元の資料が必要な時はお問い合わせを（概要は『3000万語の格差』『ペアレント・ネイション』にもあります）

「してはいけないこと」は？

- ・暴力、暴言。差別や偏見にもとづいた言動
- ・乳幼児の心身の成長発達を妨げる行為
- ・乳幼児に精神的な傷を及ぼす行為、行動や認知の歪みを生じさせる行為
- ・乳幼児の心身の成長発達に必要な働きかけ、関わりをしない

（例：『3000万語の格差』5章の内容）

判断基準は？

まず、「ここは見直したほうがいい？」と思う時の材料に使ってください。新しくしようとすると、「難しい」「ムリ！」「やめた！」になりがちだから。

- ・成長発達の今の科学が基準

しかし、日本の保育・教育（学校教育も）は、脳科学や心理学の知見を随時取り入れてこなかった（「不適切な保育＝現場保育士の無知」と言うが、その状況を作ったのは誰？）。

- ・成長発達の知識のうち、生物学の部分

日本の未就学児保育／教育者にはほぼ完全に欠けている。教育課程にない。

- ・「昭和の常識は令和の非科学」と考え、今の科学をもとに判断

✕「自分たちはこう育てられたのだから、これでいいはず」

→そうやって育てられたあなた（私も）は、あなたが育ち得る100%の形で生きていますか？ なんの傷も残っていませんか？ 自分の生育環境にあった非科学や暴力を次世代に押しつけるなら、次世代以降の状態は私たちよりも悪化するばかり。

「昭和の常識」から、科学に基づいた未就学児保育・教育へ

- ・3歳未満児はまだ人間（社会的生物）ではなく、生物としての必要と、その子の気質（✕性格）にもとづいて行動する。「その程度の存在ならかわらなくていい」ではない。真逆。生まれた瞬間から脳はすさまじい速度で成長し、かかわりが必須。

例：1秒あたり約100万個の神経細胞がつながる  
← かかわりの質が影響（『ペアレント・ネイション』）

過去30年でわかったこと。それ以前の発達学者にはわからなかった。

- ・特に3歳未満児は（以上児も当然）、生物としての必要がその子の求める形で充足されることが不可欠。自分と周囲（世界）に対する信用感づくりの過程。（詳細は5ページ）

食欲、排泄、睡眠など、自分の発した要求に（あたたかな）応えと充足が得られる。

→世界に働きかける主体（agent）としての感覚が育つ。

（発する自分の力 agency を信用、応える世界を信用＝アタッチメント）

- × 応えが返ってこず、おとなの都合で動かされると、主体の感覚は育たない。

（極端な例：ルーマニアの「チャウシェスクの子どもたち」）

- ・0歳、1歳には（おとなが考える）「お友だち」という概念はまだない。「自己」を認識し始めるのも生後6～9か月。「他者」という、自分とは分かれた存在を認識し始めるのは1歳以降。

「お友だちだよ」と伝えることは大事だが、「友だちだとわかっている」ではない。

- ・2歳は「他人」という存在がわかるけれども、「他人の気持ち」はまだわからない。集団行動もわからない。

「心の理論 theory of mind」が本格的に育ち始めるのは4～5歳。

- × 「静かに座って！」「お友だちを噛んじゃダメ！」「みんなと一緒に！」

不可能なことをさせようとする→（子どもはしない／できるはずもない）→ 保育者がいらだつ →（子どもはよけいに反発する／保育者をいやがる）→ 悪循環

- 個々の気質を理解して対応。気質は一貫しており、パターンで理解できる。
- 気質に合った対応をすれば、子どもはおとなを信用していく（個体への一貫性は不可欠）。
- 集団行動、一律行動はできない。

- ・2歳前後（1歳の間も）は、モノや食事について、あるいは周囲に対して「いや！」「やめて！」「いらぬ！」をすることが多い。

これは自我／所有感の発達（「自分」の線引きの明確化）であり、自己表現の練習。

「これがいい」「これをしたい」は意志や思考を必要とする複雑なものだが、「いや」

「いらぬ」は単純。これで練習をしておくことで、世界に働きかける主体（agent）としての力、「自分を表現する」「イヤなことにイヤと言う」基礎が育つ。

以下は、未就学児だけでなく以上児も同じ。「3歳ならできる」ではない！

- ★ 「貸して」…「いいよ」だけでなく「いやだ」「あとで」なども、その時の自分の感情にもとづいて言えるように。

- ★ 「たたいてごめんね」「いいよ。一緒に遊ぼう」という儀式を覚えさせるのではなく、「Bちゃん、たたかれたの？ 『痛いからやめて』『たたかないで』と言ってみよう」「Aちゃん、どうしてBちゃんをたたいたの？ …あ、作った船をBちゃんが壊したのか。いやだったね。だけど、たたくのはルール違反だよ。『壊さないで』って言おう」。

主張と交渉の第一歩

- × 「みんな、何をしているかな？」「今は何をやる時間かな？」「残したら、調理の先生がどう思うかな？（悲しいよ）」…等、命令を避けながら命令をし、「他人の目」「他人の評価」「みんなと一緒に」「空気を読む」を押しつける。

- × 「欲張らないで、貸してあげて」。未就学児期は自分が世界の中心。欲張って、ほしいだ

け全部抱える充足感が不可欠。だから、遊ぶ素材は、子どもがさまざまに操作でき、見立てられる単純なものをたくさん用意する。

- ・ **食や排泄の無理強い**は、行動異常やトラウマにつながる。  
食の場合、無理強いは誤嚥窒息のリスクを上げる。
- ・ **3歳以降**は、「やってみる」「できるはず」「自分が一番」がとても強い。まだ、他者との比較はできず、「Aちゃんはあれが得意だけど、自分はこれが得意。それでいい」といった思考はできない。「あなたはできない」「Aちゃんはできるのになぜあなたにはできない？」といったおとなの言葉が、せつかくの「やってみる」「できるはず」を破壊しかねない。

「やってみる」「楽しそう」といった、子どもならではの好奇心は10歳以降急速に弱まる。未就学児期に「やってみた」「楽しい」をいかに経験するか。それも、おとなが設定した活動や楽しさではなく。

- ・ **「気持ちの切り替えができない子」**と決めつけない。あなたは、ものすごく怒った数分後、ものすごく泣いた数分後、ものすごくパニックに陥った数分後、いつも通り食事したり、考えたりできますか？ できませんよね。特に、怒ったりパニックに陥ったりする時は、生物として古くて強力な脳の部位が活性化しているのだから、切り替えられなくて当然。

自分で自分の感情をとらえ、自分に対して言語化し、自分で自分を落ち着かせることができるようになることが、感情制御のスキル発達。自分でわからないまま、周囲の促しに頼って感情を切り替え続け、食べ物や遊び(=外界の刺激)で感情を切り替えていたら？

- × 「泣いてないで食べて」「さあ、落ち着いて。これで遊ぼう」。
- × 泣いている子ども、地団駄を踏んでいる子どもに長々と説教をする。

- ・ **おとなにとって不都合なことが多い子ども**を「課題のある子」と決めつけない。
  - ★ 診断をつけるのは医師や発達の特任家(と言われる人たちさえ、誤る…)。
  - ★ いわゆる先進国で、集団行動を子どもの発達に求めるのは日本の主流文化だけ。「みんなと一緒に」「おとなの言う通りに」を求めるから、「課題」も増える。

- ・ **「集団行動ができなかったら、学校で困る」?** いいえ。まず、ここまで書いてきたそれぞれの側面で「おとなにとって都合の良い子」に育つということは、どういうことか、考えてみてください。

- × 「いや」を言わない→「何をしたい」もわからない。
- × 世界に働きかけ、世界とやりとりする主体(agent)としてではなく、「まわりからどう見えるか(≒妄想? 恐怖?)」で自分を成り立たせる。

- ★ このような子どもやおとなは、これからの地球で生きていきますか？

## 保育の「言葉狩り」ではない

すべて異なる：・ゼロ歳児を抱き上げる時に…

「よっこいしょ」を言わずに、重いものを持ち上げることは不可能。一方、周囲の声のトーンは乳児の脳も理解しているのだから？

ー明るく柔らかく「よっこいしょ。重いね～」

ーうんざりして「よっこいしょ。重いね！！」

・言葉がわかる月齢の子どもに(どんな言い方でも)「体重、重いね！」

## 言葉が鍵となる場合もある。子どもを「世界標準」に育てたいなら…

相手がおとなでも子どもでも、性別（性自認も含む）、容姿（外見）、年齢、国籍、人種や民族、母語、性的指向などの固定観念（ステレオタイプ）や偏見で人を分ける、他人がいる所で本人に向かってこの種の話をする（ほめるのもけなすのも）、本人がいない所で話題にしたりするのは、差別。必要な時に、本人と会話するのは別。

他の先進国では、これで仕事を失っても当然。

★「何も言えなくなる」？ いいえ。その子がしている行動、その子が言っている言葉、その子が表現しているあらゆる感情におとなが応えるなら、なにもかもが具体的に、個別になります。なにより、やりとり（かかわり）の質が上がる。

例：「○○ちゃん、それ、じょうずだね。さすが男の子！」

→「○○ちゃん、何を作ってるの？ あ、ロケット！ その、出っ張っている所はなに？ エンジンなんだ。え、本で勉強したんだ。すごいね、先生にも教えて。」

×「こそあど言葉」

×あいまいなほめ言葉

×性別に基づく偏見

→名詞、動詞…

→具体的記述とやりとり

→使わない

脳の育ちに必要なかかわり、やりとりをする！

(『3000万語の格差』の5章など参照)

園全体で「かかわり」を見直すお手伝いもしています。「保育の安全」サイトのトップページの「トレーニングの詳細と申し込み」からどうぞ。

## 【参考資料】

高山静子先生のシート（「関わり」の本から先生が作ったもの）

「保育の安全」→「役立つリンク」→「園職員、保育・生活関係」

『改訂 保育者の関わり方の理論と実践：保育の専門性に基づいて』（高山静子、2021年。上記のシートは96、97ページ）

『保育内容 5領域の展開：保育の専門性に基づいて』（高山静子、2022年）












## ・「適切な保育／子育て」を理解すれば、「不適切」との線引きはできる

子ども一人ひとりに合わせた保育の実践例：この書籍に取り上げられている園『育児担当制による乳児保育 実践編：一人ひとりへの生活・発達・遊びの援助』（西村真実、2021年）

※私は「育児担当制」というコダエの言葉を使わず、「時差制」と呼んでいます。

(旧版の資料から)

子どもは生後すぐから、「自分」を感覚し、「自分（と自分ではない存在＝他者）」を理解し、自分と他者／周囲（世界）との関わりを学ぶ過程を始める。この過程に不可欠なのは、「自分、そして周囲に対する信用の構築」。

- ・生まれたばかりの乳児にとって、世界はわけのわからない混沌 
  - ・  を伝えたい → 泣（鳴）くしかない。
  - ・「おなか、すいた？ ミルクかな？」という声とミルク →  が解消。
    -  を泣（鳴）いて伝えると  が解消するという体験のくり返し。
    - 自分自身の感覚  への信用（言葉、概念の獲得にもつながる）。
    - 伝えることで  は解決されるという信用、解決してくれる存在への信用（排尿・排便 ⇄ おむつ も同じ）。
  - ・  泣いても応答がなかったら？ または、おとなの時間（都合）で…ミルクが出てきたら？ …おむつを替えられたら？ …寝かされたら？ …起こされたら？ 上記の根本的な信用が育たない。
    - 自分の感覚  に対する信用が育たない（応答がない＝感覚に名前もつかない）。
    - 周囲に対する信用、やりとりをすることに対する信用が育たない。  
(完全なネグレクト状態では、赤ちゃん、子どもたちは  があっても泣かなくなる。ルーマニアのチャウシェスク政権下の子ども収容施設で観察された事実。)
  - ・自分の  が周囲のおとなに理解・応答されて、適時に適切な対応をされて未就学児期を育った子どもは、自分と自分の周囲（世界）を信用に値するものだと認識。
  - ・自分と自分の周囲（おとな）に対する信用があって初めて、「私自身の意志として、この人の言うことを聞いてみよう」と感じ、そのように行動する。信用がない状態で子どもを動かそうとするなら、それは罰と報酬による支配。
- ★人間の赤ちゃんは人間である以前に、生き物（動物）です。あなたが捨て犬や捨て猫を飼い始めたらどう関わるか、考えてみてください。

#### ・安全面でも問題

- 苦手なものも全部食べて！ → 誤嚥窒息の原因に
- 食事時にはもう眠い。または、まだ空腹でない → 誤嚥窒息の原因に
- とにかく眠って！（うつぶせにする） → 睡眠中の死亡の原因に

★以上のことは家庭が基本。でも、11時間以上保育なのだから、園が果たす役割は大きい。

## 掛札逸美

心理学博士（社会／健康心理学）：専門は安全の心理学、コミュニケーションの心理学

- 「保育の安全」サイト（「保育の安全」で検索。YouTube、Facebook のリンクもここにありますが）：  
<https://daycaresafety.org/>

## 略歴

1964 年生まれ。筑波大学卒。（公財）東京都予防医学協会広報室に 10 年以上勤務。

2003 年、コロラド州立大学大学院心理学部応用社会心理学科に留学。健康心理学専攻。2007 年 1～2 月、世界保健機関（WHO）協力機関・カロリンスカ研究所／医科大学公衆衛生学部社会医学部（ストックホルム）が開催する「国際傷害予防集中コース」（5 週間）受講。2008 年 2 月、心理学博士号取得。同 5 月卒業、帰国。

2008 年 6 月から 2013 年 3 月まで、産業技術総合研究所特別研究員。

2013 年 4 月、NPO 法人保育の安全研究・教育センター設立・代表理事。2020 年 3 月、NPO 格を返上、任意団体化。

## 委員等

「平成 27 年度 教育・保育施設等の事故防止のためのガイドライン等に関する調査研究事業検討委員会」委員（内閣府、厚生労働省、文部科学省）

「千葉県社会福祉審議会児童福祉専門分科会施設部会 保育に係る重大事故検証委員会」委員長（2016 年 12 月 26 日～2017 年 8 月 31 日）。現在も同委員。

## 主な（共）著書、訳書



2022 年 12 月

『ペアレント・ネーション：親と保育者だけに子育てを押しつけない社会の作り方』

（『3000 万語の格差』の著者、サスキンド博士の  
新刊、原著は 2022 年 5 月）

